『新鋭の暴君』と『神速のインパルス』

tig

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒子のバスケの青峰とかがいる桐皇学園バスケ部に、アイシールド２１の金剛阿含を絡ませてみたという主旨のお話。

※不定期更新

目　次

神速の反射神経 ―― 1
邂逅 ―― 12

神速の反射神経

「バスケだぁ・・・？」

特徴的なドレッドヘアーの頭をだるそうに掻きながら、金剛阿含は心底気怠げにそうに聞き返した。

阿含が目に見えて不機嫌になったのを見て阿含の今日の「獲物」はびくり、と一瞬体を震わせながらも続きの言葉をなんとか紡ぐ。

「う、うん！

阿含くんと一緒に体動かしたいなあ、って思って。だめかな・・・？」

そういって金髪の少女は阿含の様子を伺うように阿含を上目遣いで見る。

「いや、構わないよ。

ただバスケなんてまともにやったことがなかったから少し不安になっただけさ」

先程の不機嫌な様子はどこへいったのかすぐさま顔にいかにも好青年といった感じの微笑みを浮かべながら対応する。

その様子に少女は頬を少しばかり赤く染め、阿含の手を引っ張って先導していく。

（あ〜かったりぃ。

なんで俺がバスケなんかやらなきゃなんねえんだよ？こいつがブスだったらすぐにでもほっぽりだしてやんのに。まあブスじゃねえからナンパしたわけだけどよ。）

内心なかなかにひどいことを考えながら手を引く少女を眺める。少女は阿含を引っ張ったまましゃべり続けており、阿含が見ているのには気付いていない様子だ。それに気づいた阿含はすぐに視線をドロっとしたものに変え、舐めるように足元から頭まで観察する。

（足はなかなかほそくて色白。スタイルも悪くねえが・・・ 如何せん胸が小せえな。B。盛ってC。顔もまあ悪くはねえが点数にすんなら70点くらい。初心な所はなかなかいいが性格が子供っぽいし、事に

運ぶまで時間がかかりそうだな、こりゃ。）
総じて６０点。
阿含は内心そうひとりごちて、
はぁ、としゃべり続けている６０点の少女にきこえない程度のため息をつく。
（別にこんくらいの女どこにでもいるし、放置してってもいいが・・・同じ学校だし噂たったらたりいからなぁ。）
阿含と少女は同じ高校である。
阿含は学校からの帰宅途中、街中でたまたま目に付いた女子高生に声をかけただけだったのだが、話をしていたら少女が１つ上の学年の先輩であることがわかった。同学年の女子にはある程度目星を付けている阿含だが、流石に入学して間もない今では他学年までは目が届いていないようだった。

「・・・　それでねー！
って阿含くん聞いてる!?」
少女がむっとした様子で阿含の方を見る。
「ああ、聞いてる聞いてる。
というかいま何処向かってるの？
近場でバスケできるとこあったかな」
「もう、露骨に話を逸らして！・・・　いま向かってるのは学校の体育館だよ。今日は確かどの部活も休みでいまいったら多分貸し切り状態だよ！」
「あー、なるほど。学校ね、うん。確か最近桐皇、勉強だけじゃなくスポーツにも力入れ始めたんだっけ？」
「そうそう。進学校だけど私立だし、やっぱり学校側も勉強以外の面でもＰＲできるところをつくりたいんだろうねー。阿含くんは部活やるの？」
「部活、部活ねえ・・・。
俺はいいかな？」
「ええー！阿含くん運動できそうなのにもったいないなあ。」

「まあ、スポーツは得意だけど好きってわけでもないからね。それよりこうやって先輩と遊んでたほうが楽しいしね。」
そういってまた阿含はニコっ、と
笑みを浮かべる。
「そそそ、そう?わ、わたしも阿含くんと遊ぶの楽しいよ・・・ ?って、もう着いたよ、阿含くん!」
少女は赤く染まった顔を阿含から隠すように顔を前に向ける。
阿含は今到着した目的地のことなどどこかへ置いたまま、そんな少女の様子を観察していた。
(こりゃあ思ったよりちょろいかもな。ちょうどいいこったし、バスケでもなんでも適当にスポーツできるとこみせてやってから教える流れにもってって、ボディタッチできる状況を作るか。この様子なら多少のボディタッチくらいは許されそうだ。)

阿含は少女の態度からここからの一連の流れまでもを即座に頭の中に組み立てる。しかし、そんな阿含の思考は少女の声によって打ち切られた。
「って、誰かもうバスケやってない?」
ダム、ダム、とバスケット特有のボールが地面を何度もつくドリブル時の音が阿含と少女の耳に届く。ガラッと体育館の扉を開けると、コートには2人組の少年がバスケをやっている光景が目に入る。
「あ、あれれ?
今日はどこも部活なかったと思うんだけど・・・」
少女がつぶやく。
その呟きにバスケをしていた少年の一人が答えた。
「ワシらはバスケ部やけど、別に部活でやってるわけやないで?ただの自主練や。遊びにきたならワシらに遠慮せんでええよ。」
「ああ、成る程。ありがとうございます!じゃあ阿含くん早速遊ぼっ!ボールとってくるね」
そういって少女は体育倉庫へと駆けて行く。阿含は少女がいなくなったことで暇になったからかだるそうに欠伸をした。そんな阿含

の耳に、バスケ部の少年の鼓膜を震わすどでかい叫び声が耳に届く。
『どっせーい!!!!!』
（うっせえし暑苦しいしうぜえ。）
　阿含が声の元へと顔を向けると身長１９０はあろうかというくらいのがっしりとした体つきの少年が叫んでいる姿が目に入る。
「うっせえぞカス！たいして上手くもねえだろうに声ばっか張り上げてんじゃねえよ！テメーは犬かよ？」
　阿含の悪態が巨体の少年ーーー若松孝輔の耳へとしっかりと届く。
「は？お前いま、俺のことをバスケが下手つったか？」
　突如見知らぬドレッドヘアーの男から罵倒されて困惑しながらも尋ねる若松。
「あ〜？いったよカス。聞こえなかったならもっかいいってやろうか？下手くそなくせに声ばっか張り上げてんじゃねえよカス。」
「なんだと!?てめえ、ふざけんじゃねえぞ!!」
　阿含のあんまりな発言に若松は額に青筋を浮かべながら近付いていく。
「ちょ、若松。落ち着けや。」
　近くにいた眼鏡の少年ーー今吉翔一が若松を宥めようと声をかける。しかし声をかけられた若松本人はというと、阿含の発言が余程頭に来ているのか今吉の発言を聞き入れる様子はない。
　若松が阿含の首元を掴み、持ち上げようとする。
　阿含が１８０ｃｍほどなのに対し、若松は１９０ｃｍをこえている。それに若松は力には自信があり、バスケでも比較的力が必要となるポディションでスタメンを獲得していた。

　ーーーーしかし、動かない。

　若松の力と体格をもってしても、阿含は１ｍｍたりとも動くことはなかった。

（な、なんだこいつ。こんだけ力込めてんのにぴくりとも動かね

え・・・。)
　若松は気味悪さを感じながらも仕方なしに首元から手を離すと、阿含に挑戦的な目を向ける。
「そんだけ俺のことを下手つうんなら、お前は俺よりバスケ上手いんだろうな？」
　明らかな挑発。
　しかし阿含はそんな挑発に黙るような性格ではなく、更に挑発で返す。
「あ〜？お前より俺が下手なわけがねえだろうが。」
「いったな!!なら１ｏｎ１で勝負しろや！お前が下手つった俺の実力見せてやるよ！」
「あ〜？いいぜ、プチっと潰してやるよ。」
　売り言葉に買い言葉、両者共に短気な性格が災いしたのか、流れるように勝負することが決まってしまった。止めようとしていた今吉はあちゃぁ、といわんばかりの様子で額を押さえている。
「勝利条件は先にゴール入れたほうが勝ちだ。３ｐの位置からうとうが、ゴール下から打とうが入りゃ勝ち。ハンデでもやろうか？」
　若松は侮るような口調でそう聞く。実際若松から見た阿含は、髪型からかスポーツ等やるようには見えず、かつ身長も若松が所属する桐皇バスケ部の平均身長である１８５よりも明らかに小さく、あってもせいぜい１８０に見える。侮りが入るのは仕方のないことなのだろう。
　阿含はそのことに気付いたのか、額に青筋を浮かべ、煽り返す。
「あ〜ハンデだぁ？てめぇみたいなカスからハンデとかいるわけねえだろうが。むしろ今上げなきゃやらねえかなあ、って思ってたとこだよ。」
「な、なんだと!?もうしらねえからな!!後で後悔すんのはお前だ！」
　バスケでの勝負だというにも関わらず、阿含と若松はいまにも殴りあいを開始しそうな勢いである。
「あ〜・・・・わかったから怪我だけはせんようにしといてなお二人さんとも・・・」

そんな二人の様子に今吉はどうしようもない、といったふうにつぶやいた。

「あ、てか君名前なんていうんーーー

◆◆◆◆◆◆◆

（あーらら・・・

まじでやるんか君ら・・・）

今吉はため息をはぁ～、とつきながら思う。どうしてこんなことになったんだ、と。

そんな今吉の気持ちをまるで気付いていないだろう若松が阿含へと声をかける。

「ハンデなんていったんだから俺から攻撃でいいよな？っっても俺の攻撃からは始めたらお前の攻撃ターンはないまま終わるけどな。」

「あ゛～んなもん別にどっちでもいいっっうの。強いていうなら俺が初めに攻撃したほうがその分早く終わるがな？」

ピリピリとした空気が両者の間を漂う。

（ほんま、水と油みたいな二人やな。なんだかこの様子見てると若松と青峰のいつもの感じ思い出すわ・・・。あって間もないのにむしろよくこんだけ険悪な仲になれるもんや・・・。）

今吉は若松と阿含の流れるような煽り合いにいつもの若松と青峰の掛け合いを思い出していた。

（まぁ、とはいってもーーーー青峰とあの・・・ 金剛阿含くんやったか。二人はちゃう。青峰は実際にバスケの実力があるが、阿含君はあの人髪型からしてスポーツマン、って感じやないし・・・。 っうか、阿含君制服のまんまやる気なんやな。ならなおのことすぐに若松の勝ちで終わるやろうが・・・ 終わった後に収集つけんのが難しそうやわ、こりゃ。）

今吉がそう考えて憂鬱な気分でいると、若松が吼える。

「抜かせッ！俺が先取でこの攻撃で終わってやるよ！いくぞ！」

若松が叫び、ドリブルを始めた刹那ーー

空気が、変わった。

（な、なんや？）

先程までのへらへらとした巫山戯た態度は既に見られず、阿含は腰を低く落とし、迫る若松を静かに待ち構えている。

獲物を見つけた肉食動物が如き鋭い眼光。その口の端は吊りあがり、若松が来るのを今か今かと楽しそうに笑っている。ーーーーまるで蟻を潰す無邪気な子供のような、そんな笑みだ。

（こんなプレッシャー今までバスケやってきて感じたことないで・・・‼？）

今吉は背中をひやり、と冷たい汗が流れていくのを感じた。

今吉は中学、高校通してバスケを続けており、多種多様な相手とマッチアップしてきた。しかしいまこうして感じる圧力はそれらの経験全ての上に行くものだった。

そんな阿含の変化を感じていたのは今吉だけではなかった。

阿含に相対している若松も、直にそのプレッシャーを受けて内心で動揺していた。

（なんなんだよこいつ・・・　‼？）

側から観戦しているだけの今吉よりも相対する若松は阿含から発せられる圧力を強く感じていた。

（この圧力、多分アイツよりも・・・　重え・・・。）

若松の頭に浮かんだのは同じバスケ部の気に入らない青峰の顔。

若松は練習をさぼり続ける青峰のことを心底気に入らなかったがその実、青峰の実力だけはしっかりと認めていた。実力がある分だけに、なおのこと気に入らなかったのだ。

そんな負けん気の強い若松でさえ実力を認める青峰に近しい圧力を阿含から感じる。こいつはヤバい、と頭が警報を鳴らしているのが

聞こえる。

だが、と若松は内心で続ける。

（いくら圧力で強く見えようったって、俺には今までバスケを続けて培ってきた経験や技術がある！俺がバスケやってないやつに、ましてや他のスポーツすらやってないような奴に負けるわけがねえんだ！）

若松は覚悟を決めて阿含へとドリブルで突っ込んでいく。

阿含は先程と同じ様に構えたまま動かない。その実、目だけはしっかりと若松へと定まっていた。

（右か、左か・・・どちらに切り込めば抜ける・・・？いや、ここは一度左にいくようにフェイントを混ぜてから右に即座に切り替えして抜く・・・!!）

若松が阿含の前で左に切り込む動作を見せる。若松の狙い通り、阿含はその動きに合わせて、即座に若松について行く。

（かかったなアホがッ！

本命は右だあああ！）

阿含から発せられるプレッシャーがむしろ若松に適度な緊張感を持たせ、普段よりも鋭いドリブルで若松は右に切り返す。

阿含はフェイントにかかった。

反対に切り替えした若松についてくるのはいまの若松のスピードや、阿含の体勢から考えて通常ではありえない。

ーーーそう、通常ではありえない。

「俺の・・・勝ちだッ！」

若松は勝ちを確信して呟く。

しかし、そんな若松の耳に悪魔の囁きが届いた。

「い～や、違うね。

テメェの負けだカス。」

阿含を抜き去ったかに思えた若松の前にーーーー再び阿含の姿が現れる。
『!?』
若松と今吉の目が驚愕で見開かれる。
（な、なんで・・・ !!俺はこいつを確かにいま抜きッーーー）
「はい、お疲れさん、と。」
バシッ、という音が体育館に鳴り響く。阿含は若松からボールを弾き飛ばし、そのボールがコートから出る前に即座に自分の元に確保していた。
ボールを奪われて困惑する若松とは対照的に、阿含が侮るような口調で若松を煽り始める。
「やっ～ぱ、お前カスじゃねえか！俺みてえなバスケ未経験の、ましてやスポーツすらもやってない初心者1人抜けねえとはなぁ？」
一体何が起こったのか理解できない若松は阿含の煽りにも反応を示さず、そんな阿含の姿を夢でも見ているかのような呆然とした様子で見ていた。

◆◆◆◆◆◆

（こりゃ、あかんわ。）
勝負はすぐに終わりを迎えた。
次に攻撃した阿含が、明らかに動きに力がない若松をあっさりと抜き去りレイアップで危なげなくゴール。
しかもその抜き方は、先程の若松が阿含に仕掛けた抜き方と全く同じだった。
失意のうちに立ち尽くす若松に、楽しげに笑い続ける阿含。
その光景を離れてみていた今吉は、すぐに冷静さを取り戻した頭でつぶやいた。
（今の1プレイでわかった。今の実力はともかく・・・ 阿含君の素質は

青峰達【キセキの世代】と同列かそれ以上の・・・・ バケモンや。）
バスケの経験が長い今吉は確信する。
（今のプレー。阿含君は明らかに若松のフェイントに、かかっとった。あの体勢から反対側に切り替えした若松に追いつくのは普通の人間にはできるもんやあらへん。
ーーーやが、阿含君にはそれが出来た。）
今吉は先程の光景を思い出しながら考える。
そのありえないことを可能にしたのは、阿含の『反応速度』だと。
（若松が切り替えしたのと、ほぼ同時に阿含君はすぐに体勢を整えて若松の前に現れおった。若松の行動を「見て」から対応してたんやろが、圧倒的優位な体勢だった若松に難なく追いついた。
それは冷静に若松の行動を読みきっとったわけでも、経験から裏打ちされた野生の反応でもない。そんだけ若松を見てからの反応がありえへん速度だったっちゅうことや。これはもう努力とかでどうにかなるもんちゃう、先天的に与えられた天賦の才やで・・・・。これでバスケ初心者、てのが信じられんくらいの動きや。
それに、
多分・・・ 阿含君はフェイントにまんまとかけられたんちゃう・・・・わざとかかったんや。フェイントに掛かっても尚、それに反応できるだけの自信があったから・・・・
いや、正確には違うか？）
今吉は阿含へと目を向ける。阿含は未だに若松へと罵倒の言葉を吐き続けており、その顔には底無しの悪意がありありと浮かんでいた。
（初めから普通にボール奪うこともできたろうに、あえてフェイントにかかってからそれを潰す。自信があったから、というより若松のバスケへの自信や誇り、それを砕くためにこういうプレイをしたんかやろうなあ・・・・ 怖いやつやで・・・）
今吉はブルリと体を震わせる。
（やけど、）
今吉は緊張からか渇いた唇をペロリ、と舐めて考える。その姿は宛

ら獲物を見つけた蛇のようだ。
（青峰に加えて、この阿含君もバスケ部に入れば・・・　桐皇が全国1位になるのにも夢やあらへん・・・　!!!!）

そこまで考えて今吉は口を開く。

「なぁ、阿含君、やったよな？」
内心ではバスケを始めたばかりの昔の自分のように熱い思いで一杯だがそれをおくびにも出さずに今吉は阿含に声をかけた。
「あ〜？
なんだ？テメェもやるっつうのか？」
阿含は先程までの楽しげな雰囲気から一変し、刺々しい雰囲気を今吉へと向ける。
「いやいや、今の光景見てワシがやる気になるわけないやんけ。そんなことちゃう。」
「んじゃぁなんだっつうんだよ？」
「いや、何、ちょっとしたことや。」

ーーーーバスケ部、入らへん？

今吉の予想外の発言に、
【神速の反射神経】を持つ阿含は
しかしすぐには反射できず、硬直した。

邂逅

「たりぃからパス。」

硬直から解け、今吉の発言の意味を理解した阿含は困惑しながらも勧誘をあっさりと断わった。

しかし今吉もその返答は予想していたのか、わざとらしく大袈裟に驚いた様子を見せるが実際には全く驚いていなさそうな様子で続ける。

「ええ～～っ・・・

他の部活入ってないんやろ？」

「入ってねえが。」

「入りたい部活でもあるん？」

「ねえけど。」

「ならええやん～！入ってくれや～！」

（こ、こいつめんどくせぇ・・・！）

阿含は目の前少年ーーー今吉翔一に対してどう対応いいかわからなくなっていた。

普段の阿含ならば「うざい」と思えば即殴り、「たりぃ」と思えばキックをお見舞いすることくらいすぐにやってのけるのだろうが、今の状況からその選択肢を失っていた。

というのもーーー

「阿含君、私がいない間にバスケ部に勧誘って一体何がどうしたの!?」

ボールを取って戻ってきた６０点の少女の存在が原因だった。

今阿含は知り合ったばかりの長身の眼鏡に加えて、これまた今日ナンパしたばかりの連れの少女の二人に詰め寄られているという大分混沌とした状況の真っ只中にいる。

（このクソ眼鏡は恐らく俺が手を出さない限りは黙ることも諦めることもないだろうし、かといって俺がこのカスを殴れば折角落としかけてる女を失うことになる・・・。）

阿含は思考を働かせるが、考えれば考えるほどにいまの状況が所謂〝詰んでいる〟状況だということを思い知る。

「なぁ～!!ええやろぉ!?」
「ねぇ、阿含君！
一体何が起きたのよぉ～!?」
阿含が考えている最中でさえ、二人の猛攻は止まることを知らない。ついには二人は共に阿含の方に前から、後ろから手をかけてゆさゆさ、とゆすり始める。この2人自体には直接の関わりはないはずなのにも関わらず、大した息の合いようだ。
（こ・・・・このカス共が・・・・！
黙ってりゃ好き勝手にやりやがって・・・）
表面上は困ったような笑みを浮かべながら2人にゆすられている阿含だが、内心ではブチ切れる一歩手前だった。
（つうか、もしかしてこのクソ眼鏡、実は今の俺の状況に気付いてやってんじゃねえか？）
阿含が気付いたように今吉に目を向けるとーーーー今吉はペロ、と舌を出し、その細い目を皿に細めて悪戯が成功した少年のような微笑みを浮かべた。
（こいつ絶対わかってやってやがる・・・！）
ふつふつと更に怒りのボルテージを上げる阿含。
（ここで逃したら、多分もう入ってくれる機会なんてあらへん・・・！使えるもんは何でも使ってでもバスケ部に入れさせたる・・・！）
しかし揺すっている今吉の方も割と内心必死だった。
互いに顔には出さずに水面下で次の手を考える。頭も優れている天才金剛阿含と心理戦に長けた今吉翔一の頭脳バトルが始まろうとしてーーーーしかし、そんなカオスな状況は1つの乱入者の声で打ち切られた。
「な～にやってるのっ、今吉さん？」
よく通る鈴の音のような声。
突然の乱入者に三人は一度動きを止め、声のした方を見る。
三人の視線の先には桃色の髪の少女がいた。腰まで伸びる長く、さ

らさらとした髪。キュッとしまった腰回りに出るところはでた完成されたスタイル。正に美少女、といった感じの少女だ。
今吉は知り合いなのか、少女に手を振り、６０点の少女はその姿を見て女としての敗北を静かに悟る。
そして阿含はーーーー既に行動を開始していた。
「やぁ、僕は金剛　阿含っていうんだ。今吉さんのお知り合いかな？いま丁度バスケの指導をしてもらっていたところさ。今吉さんに今会いに来るってことは君はバスケ部のマネージャーか何かなのかな？」
阿含は人のいい笑みを携えて現れた少女へと自己紹介をしながら話しかける。今吉と６０点の少女のこと等最早頭にないのか、２人の方を振り向きすらしない。
そんな阿含の様子に今吉は数瞬の間呆れを浮かべていたが何か思いついたのかニヤリとその顔に腹黒そうな笑みを浮かべ、６０点の少女は失意の中圧倒的戦力差を前に立ち向かう気力を失い、静かに立ち去っていった。
そんな状況に困惑しつつ何か悪いことをしたのかもしれない、と頭に浮かべ、ポーっとしていた桃髪の少女だったが、とりあえずは考えないことにしたのか頭をブンブンと左右に振り、阿含にすぐに対応した。
「あ、ご丁寧にどうも！
私は１年の桃井さつきっていって、ご推察の通りバスケ部マネージャーをやらせてもらってますっ！」
「へぇーさつきちゃんって言うんだ。名前も顔もかわいいね。今吉さんに用がある風だったけど、どうしたの？」
さりげなく名前と容姿を褒めながら会話をすらすらと淀みなく続ける阿含。
少女ーーー桃井も満更ではないのか、少し頬を染めながら続ける。
「あ、ありがとうございます・・・？今日は今吉さんに大ちゃんを連れてきてって言われたから来たんですけど・・・あ、大ちゃんっていうのはバスケ部のメンバーの１人の青峰大輝のことです！」

その後に続けて阿含が更に喋ろうとするが、それを今吉の声が押しとどめた。
「桃井、悪いなぁいちいち呼び出してもうて！」
そんな今吉に眉を顰める阿含だが、すぐに元の人柄の良さ気な笑顔へと戻った。
「全然構わないですよ今吉さん。大ちゃん全然練習に参加しようとしないから丁度無理やり連れてきてやろうかって考えていたところです！」
「相変わらずやなぁ～青峰の奴。」
「本当ですよ！
で、それはそれとして、何でそこで若松さんがすごい落ち込んだ様子で四つん這いになってるんですか？」
桃井の視線の先を見ると、そこには先程から全くいない扱いに等しい立場に立たされていた若松がいた。心なしか阿含に負けた直後よりも、更に負のオーラを纏っているようにみえる。
（そ、そうやった、若松が落ち込んでるん忘れてたわ・・・。だけど、これは逆に好都合・・・。若松、すまんがここは利用させてもらうで・・・！）
純粋に若松のことを忘れていた今吉だったが、その若松すらも利用することに決め、今吉は話し始める。
「いやぁ、理由は省略するけどさっきまでこの【バスケ部入部希望者】の阿含君と若松がｌｏｎｌやっとったんやけど、阿含君初心者らしいのに若松負けてもうて、落ち込んじゃってるんやわ。」
今吉がそう桃井に【バスケ部入部希望者】を強調しつつ話す。その時、桃井には見えない角度から阿含が自分をそれだけで人でも殺せそうな程の眼光で睨んでいるのを今吉は見た。しかし、今吉はとまらない。否、もう止まることはできない。後は走り抜けるだけだ。
「いやぁ～！すごいやっちゃでこの新しい【桐皇バスケ部部員】の阿含君は！阿含君ならすぐにスタメンとることになるで、多分！」
「え～！そんなにすごいんですか、阿含君って!?」
桃井が期待を込めた目で阿含の方を見る。

阿含は瞬時に睨むのを止め、諦めたようにため息を吐きながら、返答する。
「いやぁ、そんなことないさ。
確かに運動は得意だけど、バスケはまだまだ初心者で全然。さっきそこのカーーーー若松さんに勝ったのだって、偶然偶然。」
カス、という言葉を飲み込み、阿含は困ったように首を振った。
「いや、いまのはまじで偶然やないで?ワシかて負けそうなくらいやからな、阿含君は。あの青峰でも、もしかしたら負けるかもしれへん。」
阿含は今吉が話の「青峰」という男を自分よりも同等かそれ以上だとみているような発言に今吉に対して威嚇するような表情を向けるが、桃井が阿含の方をふり向こうとしていたのに気付き、即座にまた顔に微笑を貼り付けた。
「今吉や大ちゃんにも!?
始めたばっかなのに今吉さんにそこまで言わすなんて、阿含君ってすごいんだね。バスケ部入ってくれて心強いよ!」
「ははははは・・・。まあなにはともあれ、これからよろしくね、さつきちゃん。」
「はい!顧問の先生には後で連絡いれて、入部手続きも私がやっておくので、生徒手帳貸してください!」
阿含も断るわけにもいかず、
内心では今吉への怒りで一杯になりながらも、今吉の策略によってバスケへと入部することとなった。
(このカス眼鏡、覚えとけよ・・・ !)
(なんとかうまくいったけど、これワシの身が危ななってもうたわ・・・。これからどないしよ・・・。)

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「あ、それで結局青峰はどないしたん?姿が見当たらん、てことはやっぱ来んかった?」

今吉が本来の要件を思い出したのか、桃井に尋ねる。
「ああ、大ちゃんならさっきジュースを買いに・・・ ひぁっ！」
桃井が首筋に冷たい缶を当てられ、短い悲鳴を上げる。桃井が振り向くと、そこには先程までジュースを買いに購買にいっていた青髪の少年ーーー青峰大輝が佇んでいた。
身長は１９０ｃｍを越えており、若松や今吉と同じく阿含より拳１つ分程大きい。ドレッドヘアーの阿含とは対照的に短く切り揃えられた青髪に、細身だが筋肉質で豹のようにしなやかな体。
阿含は何か思うところがあったのかその目に観察するような色を宿しーーー数瞬後、視線を青峰からはずした。
「なにするの大ちゃん！」
「その呼び方はやめろっっっってんだろ、さつき。」
そういいつつジュースを桃井に渡す青峰。
「おー、青峰！ようやく来たか！」
「うっす。今吉さん、今日はまたなんで俺を呼んだんすか？」
「今日は若松とワシの練習相手になってもらえへんかな、と思ってよんだんやけど・・・」
「だけど、どうしたんすか？」
「いやー、他にやってもらいたいことができたんや。」
そういってチラッと阿含の方をみる。視線を向けられた阿含はというと、バスケ部に入部するということでマネージャーである桃井とラインの友達登録をしている最中であった。
「あのドレッドヘアーのコ、金剛阿含ゆうんやけどな？その阿含君と１ｏｎ１をやってほしいんやわ。」
『は？』「えっ？」
阿含と青峰と桃井が声を漏らす。
今吉はそんな三人の様子をまるで意に介さないかのように続ける。
「いや～青峰、全然練習参加しいへんから、同期の１年とも距離感あるやん。普段なら別にそれでもええんやけど、阿含君すぐにスタメンなりそうやし、同じフィールド立つ事なった時、初めてお互いの実力知る、て色々あかんやろ？」

それに、と今吉は続ける。

「青峰、阿含君お前よりバスケ上手いかも知れへんで？」

今吉が青峰へと言葉を放つ。

「ハッー面白いこというな、今吉さん。」

青峰はその言葉を鼻で笑う。

中学時代から自分に並ぶような敵は居らず、『俺に勝てるのは俺だけだ。』とすら豪語している青峰だ。そんな言葉を間に受けるわけもない。実際青峰は【キセキの世代】と呼ばれた時代のトッププレイヤーの５人のうちの１人だ。その実力は折り紙付きで、名声は桐皇だけには収まらず、高校バスケに少しでも関心のある人間ならば、知らぬ者はいない程である。青峰にいたっては最早相手になるプレイヤーがおらず、自らがこれ以上上手くならないように、と練習をやめてしまった。これは青峰が傲慢なのではなく、純然たる事実である。

勿論そのことは目の前の今吉だってわかっているはずだ。わかっていて、何故このようなことをいうのだろうか。青峰は今吉に名を阿含、と教えられた少年の方を見る。

身長は１８０あるかないか、体格は桐皇のバスケ部の中ではそれ程優れているわけでもない。むしろ身長が大きく影響するバスケに於いていえば劣っている方だともいえる。

だが、青峰が阿含の体をよくよくみると服の上からでもわかる程に引き締まった体には無駄な脂肪が一切ついていないだろうことがわかった。正に運動することに適した体。その体は青峰と比べても勝るとも劣らないだろう。

だが、それだけでは【キセキの世代】でエースを務めあげた青峰大輝にはかなわない。

流石にここまでの肉体をもったプレイヤーは他にはなかなかいないかもしれないが、似たような体つきの選手は青峰の過去の経験の中に掃いて捨てるほどいた。

しかしーーーー青峰はその全てを打ち倒してきた。

そんな青峰を知っている今吉が知っていてなお対戦を進めてくる相手。
（見かけだけじゃ測れねえ〝何か〟を今吉さんはこいつに見たのかも知んねえ。）
青峰は笑みを浮かべる。
（もしそうなら、負ける気はしねえがーーーーこいつとやってみるのは面白いかもしんねえな。）
「な？どうや？」
今吉の尋ねる声に、青峰が答える。
「いいぜ、今吉さん。
１ｏｎ１、やってやろうじゃねえか。」
「おお、よかったよかった。阿含君もええよな？」
そういって今吉は阿含へと顔を向ける。
今吉の視線の先にいた阿含は、いい加減我慢の限界なのか俯きながら小刻みにプルプルと震えていた。
（さっきからこのカス、女がいるから俺が黙ってんのをいいことに好き放題にやりやがって・・・ さっきのカスよりはまだマシみてえだが、何で俺がまた追加で遅れてきたカスを相手にしなきゃなんねえんだよ。）
だが、と阿含は続ける。
（さっきの６０点女ならともかく、この極上の女の前で怒鳴り散らすわけにもいかねえ・・・。
最初のイメージってのは、後々の関係を築き挙げていく上で大きく影響する。眼鏡には後で報復するとして、今は無理な言い訳して断るよりも、こいつが自信ありげに押してきたこの青峰とか言うカスをぱぱっと潰してアピールする方が明らかに生産的だ。）
そこまで考えて阿含は返事をした。
「あ〜いいっすよ。」
阿含がそう答えた時、
桃井が声を上げる。
「あ、そういえば阿含くんのこと、とりあえず先生にだけは伝えにいっ

てくるね！できるだけ早く帰ってくるようにするから、１ｏｎ１するなら私が来てからお願いしますっ！」
それだけいって、
桃井は即座に体育館を後にする。
（うわ、また嫌なタイミングで桃井いなくなってもうたな・・・。）
「・・・ んじゃ決まりやな。
ルールはさっきと同じまんま、ゴールに一発入れば終わり、ちゅうことで。」
ルールを話す今吉。
しかし青峰はそんな今吉の説明に異を唱える。
「は？１点決まれば終わりとか、俺の攻撃一発で終わっちまうじゃねーか。折角少しは楽しめそうな相手なんだから、もうちょい長くできるように決めてくれよ。」
青峰が素でいった言葉。そんな青峰の放った言葉に、阿含が反応した。
「あ〜？そうだなぁ。
俺の、攻撃一発で決着はつまんねえし、こいつの言う通りに長くできるようにしてやってもいいぜ？最終的な結果はかわんねえしなあ。」
（あ、こりゃ・・・）
まずい、と今吉が思った次の瞬間には既に青峰が阿含の挑発に食いついていた。
「言うじゃねえか？
だけど大口叩いてっと、後で恥ずかしいことになるからやめといた方がいいぜ？」
「テメエこそカスの分際で強がんのはやめといたほうがいいぞ？どうせさっきのカスと同じようになるんだからな。」
「さっきのカス？」
青峰が頭に疑問符を浮かべると、阿含は顎でクイッと若松の方を指す。

青峰は若松を見て阿含の言いたいことを理解すると、さらに笑みを深める。
「へぇ、若松・・・ さんに勝ったんだな。なおのこと面白そうだ。俺を退屈させるようなことだけはしないでくれよ？」
そんなピリピリとした空気の中、今吉はというと
（こいつ、いつまでこのままでおるんや？）
と若松の方を見て軽く現実逃避していた。